

ソクラテスと現代

—「恐ろしいことと恐ろしくないことについての知」としての勇気をめぐって—

三 嶋 輝 夫

本日の論題は『ソクラテスと現代』という些か大袈裟なものになっておりますが、ここでは勇気概念に的を絞って考えてみることにしたいと思います。

一般にソクラテスというと直ぐ「魂の世話」(psūchēs therapeiā)という考えが頭に浮かびます。それと同時に魂を良い状態にもたらしものとしての徳の探求が連想されます。周知のごとく、当時の代表的な徳目としては、正義(dikaiosynē)、節度(sōphrosynē)、勇気(andreīā)、智恵(sophiā)の四元徳があります。宗教的徳目としての敬虔(hosiotēs)もまた重要な徳目の一つです。これに対して今日最も論じられることの多い徳目は正義であるように思われます。この一年間の国際政治をめぐる論争においても、正義は依然として最も熱い、あるいは最も人を熱くする主題のようです。しかし他の古典的徳目もまた決して現代的意義を失ってはいないのではないのでしょうか。いまだにバブルの二日酔いに苦しむ我がポリスの有様を見るにつけ、「度を過ぎずなかれ！」(mēden agān)とのデルフォイの神殿の柱に刻まれた格言の正しさと節度の大切さを実感します。それは物事の先と底を見通す洞察としての智恵の重要性にもつながることでしょう。では勇気についてはどうでしょうか。昨年来、二つの事件をきっかけとして、いつにもまして勇気が話題にのぼる、あるいは称えられることが多かったように思われます。二つの事件とは、昨年(2001年)1月26日のJR山手線新大久保駅構内に於ける救出死事件と9月11日のニューヨークにおけるテロ事件です。

前者においては、ホームから転落した人を助けようとして線路に降りて轢死した二人の男性の勇気が称えられました。後者においては、現場への救出に向かって命を落とした消防士たちの勇気が称賛されました。いずれの場合においても、人命救助という高邁な目的達成のために死の恐ろしさをものともせず行動することが勇気であると見なされ、賞賛されていると考えてよいでしょう。ところが意外なことにはソクラテスによれば、勇気とは決して「恐ろしいことに立ち向かう」ことにあるのではなく、逆に「恐ろしいことを避ける」ことにあるようなのです。これはいったい逆説なのか当たり前のことなのか、この点についてプラトンの作品の中でも勇気について主題的に論じている作品を中心に考えてみることにしましょう。

(1) 『ラケス』におけるニキアスの定義

初期対話篇の一つとされる『ラケス』篇においては、先ずリュシマコスとメレシアスという二人の父親から年頃になった自分たちの息子を最も優れた者にするためには何を学ば

せたらよいかという問が提出され、その問に対して魂を優れたものにする要因としての徳の必要性が確認されます。そこで問題はその肝心の徳を誰が若者達に教えることができるのかということになり、次にその教授資格の有無の基準が問われます。その基準として立てられるのは「徳とは何か」を知っているかどうか、つまりそれについて言葉で説明できるかどうかということなのですが、一挙に徳の全体を扱うのは難しいということで、取りあえず若者が学ぶにふさわしい科目として勧められた「重装武闘術」と関係が深い勇氣について、それが何であるかが問われることとなります。

実際の議論の展開としては、先ず作品の題名にもなっている將軍ラケスがソクラテスの間に答え、彼が行き詰まったところでもう一人の將軍であるニキアスが登場します。ラケスとソクラテスのやり取りの部分も非常に興味深い内容を含んでいるのですが、ここではニキアスの答えに絞って検討することにしたいと思います。

ニキアスによれば勇氣とは「恐ろしいことと平気なことについての知識」(hē tōn deinōn kai tharralēōn epistēmē) であるとされます。ここで「恐ろしいこと」と訳したギリシャ語は "ta deina" で、定冠詞中性toの複数主格形に形容詞deinonの中性複数主格形を加えたものですが、「恐れるべきこと」という風に規範的ニュアンスをもたせて訳すことも可能です。というのも後で見るように、本人からすれば「恐ろしいこと」が本来は「恐れるべきこと」ではなく、実は本人にとっては「平気なこと」こそ「恐れるべきこと」であるということもあり得るからです。

『ラケス』の中では、ニキアスよりも先に答えることに失敗したラケスは、ニキアスも失敗させようと、このニキアスの定義を攻め立てます。問題は先のta deinaの内容です。

ラケスは先ず個別技術に関して、それぞれの管轄領域における「恐ろしいこと」を知っているのは、「勇氣のある人」ではなく、それぞれの領域に関する専門家ではないかと尋ねます。例えば、病気について「恐ろしいこと」を知っているのは医者であり、農作物に関して知っているのは農夫ということになります。つまり現代の分かりやすい例で言えば、単なる胃炎か胃癌か区別できるのは医者であり、稲の状態を見てイモチ病かどうか判断できるのは農夫もしくは農業の専門家のはずだと言うわけです。と同時にラケスは、逆にこれらの専門家が、それぞれの領域における「恐ろしいこと」を知っているというだけで勇氣があることになるのかとニキアスを問い詰めます。これに対してニキアスは、例えば医者を知っているのは「健康的なもの」と「病的なもの」を見分けるだけのことに過ぎず、そもそもある人物にとって病気が治る方がよいのか、それともそのまま死んでしまった方がよいのかについての知識は持ち合わせていないことを指摘します。このニキアスの回答は、彼の考える「恐ろしいことについての知識」が専門技術知とは次元を異にするものであることを示しています。結局、ラケスはニキアスを攻めあぐね、憎まれ口を叩いた上で、ソクラテスに吟味のバトンを譲ります。

バトンを引き継いだソクラテスは先ず、「恐ろしいこと」の意味するものの明確化に取りかかります。ソクラテスによれば、「恐ろしいこと」とは、「恐れをひきおこすもの」であり、また「恐れ」(deos)とは「これから生じる悪についての予期」(prosdokiā mellontos kakou)

に他ならないとされます。以上からソクラテスは、「恐ろしいこと」とは「これから生じる悪」のことでありと結論し、ニキアスもこれに同意します。この同意を梃子としてソクラテスは曲芸的な議論の末にニキアスによって与えられた勇気の定義が不十分であることを主張するのですが⁽¹⁾この論駁の妥当性と意図について論じることはそれだけで独立した論考を要する作業なのでここでは割愛することにします。むしろ我々にとって重要なのは、『ラケス』においてはこの定義がニキアスによって主張され、ソクラテスによって「反駁」されていることです。ところが意外なことには、この作品に続いて書かれたとされる『プロタゴラス』においては、一見したところ全く同じと思われる定義が、今度はソクラテスその人によって提唱されているのです。果たしてこれはどういうことなのか、まずは問題の箇所を見てみることにしましょう。

(2) 『プロタゴラス』における勇気の定義

『ラケス』同様、初期対話篇の一つとされる『プロタゴラス』という作品は極めて華やかな演出が施された手の込んだ作品で、それだけに解釈 — 例えば「快の計量術」をどう位置づけるか — も容易ではありませんが、ここでは勇気の定義だけに注目したいと思います。

既に見たように『ラケス』においては、「徳とは何か」という問に直接ぶつかることは避けて、取りあえずの方策として「勇気とは何か」が問われたわけですが、それとは異なり、逆にこの作品においては「徳の教師」を自認するソフィストのプロタゴラスの徳理解を検討するという形をとりながら、最初から徳の総体が問題とされ、むしろ諸徳相互の関係 — その同一性と差異性 — を問う中で「勇気とは何か」も問題とされているとみてよいでしょう。

人間こそ万物の尺度であると主張する「人間万物尺度論」で有名なプロタゴラスによれば、正義、節度、智慧、敬虔などの徳は互いに似通っているのに対して、勇気だけは違いとされます。つまり「並はずれて不敬虔、不正、放埒、無知な人間でありながら、ただ勇気だけはとくに衆にぬきんでいているというような人々がいる」(359b3-5 藤沢令夫訳 岩波文庫による)と主張されます。そこでソクラテスはこの勇気の特異性についての主張の吟味に着手するわけですが、ここにおいてもソクラテスは「恐れ」を「悪いことの予期」(prosdokiā tis kakou)⁽²⁾と言ひ換えたうえで、本来、好きこのんで悪いことを選ぶ人間は一人もいないはず — いわゆる「ソクラテスの逆説」 — であるにもかかわらず、実際には臆病な者と勇気ある者が反対のものに向かう(もしくは反対のものを避ける)という事実から、臆病は「恐ろしいこと(=悪いこと)と恐ろしくないことについての無知」であり、その反対の勇気は「恐ろしいことと恐ろしくないことについての知」(hē tōn deinōn kai mē deinōn sōphiā)に他ならないと結論します。

ここで興味深いのは、既に指摘しましたように『ラケス』においてはニキアスによって提案され、ソクラテスによって反駁されたかに見える勇気の定義が今度は、ソクラテス自身の口から語られ、正しいものと見なされているように見えることです。果たしてこの勇

気の定義は肯定されているのでしょうか、それとも否定されているのでしょうか。普通、この定義をソクラテス自身、もしくは著者プラトン自身の見解と見なす解釈の有力な証拠として挙げられるのは、『国家』第四巻における戦士階級の徳としての勇氣の定義です。そこにおいては、勇氣は「恐ろしいものとは何であり、どのようなものであるかについて、法律により教育を通じて形成された考えの保持」(429c7-8 藤沢令夫訳 岩波文庫による)とされています。厳密に言えば、ここで「考え」と訳されている単語は私見や信念を意味する“doxa”であり、既に見た『ラケス』や『プロタゴラス』における勇氣の定義に現れる「知識」あるいは「知」を意味する“epistēmē”や“sophiā”と比べると認識論的地位の低い述語なのですが、ここではその相違は無視してさしつかえないでしょう。

この『国家』の箇所は確かに一つの有力な手がかりとなるように思われますが、ここで私がおの箇所以上に有力な証拠として提出したいのは『ソクラテスの弁明』の一節です。最後に我々はプラトンによる「ソクラテスもの」のアルファにしてオメガとも言うべきこの作品に目を向けることとしましょう。

(3) 『ソクラテスの弁明』における「恐ろしいこと」

『ソクラテスの弁明』においては、『ラケス』や『プロタゴラス』においてなされているような仕方でも勇氣について論じられてはいません。それはむしろ裁判の場におけるソクラテスの言行を通して示されているのだと言った方がよいかも知れません。その中でも重要だと思われるのは、ソクラテスが死と不正のどちらを恐れるべきなのかを論じている箇所です。

そこでソクラテスは、自分が哲学的使命を遂行することによって命の危険を招いていることを揶揄する人間に対して反論し、人は戦場において上官の命令に従う以上の忠誠心をもって神の命令に従うべきことを主張します。

「・・・アテナイ人諸君、もしかりに私を指揮するために諸君が選んだ指揮官たちが私を配置したその時には — それはポテイダイアにおいてもアンピポリスにおいてもデーリオンにおいてもそうだったのですが — かれらが配置した場所に私が他の人同様踏みどまると、討ち死にする危険を冒しておきながら、他方、神が、哲学しながら、すなわち自分自身と他の人々をともに吟味しながら生きるように命じられた — そのように私は考え、受けとめているのですが — その時には、死や何か他のことを恐れて持ち場を放棄するとしたら、私は恐ろしいこと (deina) をしでかしたことになるでしょう。いかにも、それは恐ろしいこと (deinon) でしょうし、その時こそ私を裁きの場に引っ張り出すのが真に正義にかなったことでしょう。」(28d10-29a2 拙訳 講談社学術文庫による。)

以上の引用の中で「恐ろしいこと」という表現が二度繰り返されていることに注目しましょう。ソクラテスからすれば、恐ろしいのは命を失うことではなく、神の命令に背いて哲学するという使命を放棄すること — それは最大の不正をおかすことに他ならない — なのです。そして、この箇所に続く言葉の中で説明されるように、必ずしも悪いことと決まったわけではない死を最大の災いと思いこんで、神への不服従を筆頭に、悪いことがはっ

きりしている不正以上に死を恐れることは、まさに「無知の無知」の極みに他ならないのです。別の言い方をすれば、ここでソクラテスは、人々が現に恐れているものが必ずしも真に恐れるべきものであるとは限らないことを強調しているのだとも言えるでしょう。

なるほどここでは勇氣という単語は出てきませんが、事実上ソクラテスは「恐ろしいことと恐ろしくないことについての知識」を持つことの決定的重要性を主張するとともに、まさにその知識、見極めに基づいて「恐ろしいこと」を避けるべきことを説いていると見てよいでしょう。そしてここに我々は、「恐ろしいことと恐ろしくないことについての知識」をソクラテスもしくはプラトン自身による勇氣の定義と見なすべき最も有力な証拠を見出し得るように思われます。しかし、プラトンにあっては実は話はここでは終わらず、さらに掘り下げたところで議論が展開されているように思われます。この点について、勇氣の現代的意義の問題と関連させながら考えてみることにしましょう。

(4) その現代的意義

以上、我々はソクラテスの勇氣観について見てきたわけですが、最後にもう一度冒頭で触れた二つの事件に照らしてその現代的意義について考えてみることにしましょう。

先ず新大久保駅でホームから転落した人を救出しようとして線路に降りた二人の方については、一般的な言い方をすれば、命の危険も省みず、死の恐怖を克服して人命救助に努めたことになるでしょうが、ソクラテス的に言えば、死の恐ろしさ以上に、その時その場で助けようとしないうことによって後で味わうであろう良心の呵責を恐れたとも言えるかも知れません。その限りにおいてはソクラテスと同様の意味において死よりも不正 — この場合は目の前で命の危険に晒されている人間をいわば見殺しにするということ — を恐れたと言えるのではないのでしょうか。

他方、ニューヨークでのテロ事件に際しての消防士の救助活動について言えば、前の例の一般市民の純粋な自己犠牲とは異なり、消防士としての職務遂行の結果としての悲劇すなわち殉職 — この点においては先に見た『国家』における戦士の徳としての勇氣に近いのではないかと思うのですが — という性格があるため単純に同一視することはできませんが、しかしこの場合も職務が要求すること以上のことを果たそうとしたと見ることはできるでしょう。そしてそれは何故かと言えば、やはり前のケース同様、自分が消防士としての責務 — その場合、本人の意識からすれば、消防士としてということと一個の人間としてという区別はもはやあまり意味をなさないかもしれませんが — を果たさないという不正を死以上に恐れたからだとも言えるでしょう。

ただここで一つの疑問が浮かびます。それは仮に以上の二つの悲劇的事件で命を失った人々が勇氣があるとして — 勿論、それを否定する人はあまりいないでしょうが — 、それではその時同じ場所にいた他の人間達はどうなるのかという疑問です。消防士の場合には職務遂行という相違があるため他の人との比較は難しいので、取りあえず新大久保駅の場合に絞って考えることにして、果たして線路に降りなかった大多数の人は「臆病」つまり『プロタゴラス』の規定で言えば「恐ろしいことと恐ろしくないことについての無知」

ゆえにホームに留まったのでしょうか。おそらくは人が線路に落ちようが落ちまいが全く気にもしなければ何も考えもしない人も結構いたのではないかと思います。他方、瞬時の出来事とはいえ、どうすべきかかなりその場でも悩み、また事件の後でも悩み続けた人もいると思うのです。果たしてこのような人は、死を不正よりも恐れたことになるのでしょうか。必ずしもそうではないでしょう。

ここで我々はソクラテスがいずれの対話篇においても「恐れ」を「悪いことの予期」（ここでは時制の限定の有無は括弧に入れます）と言い換え、「恐ろしいこと」を「悪いこと」と同一視していたことを思い出す必要があります。もし「恐ろしいこと」が「悪いこと」であるとすれば、当然、その時その場で目の前の人を助けること、あるいは助けられないことによる単一行為のプラス・マイナスだけではなく、その後その行為の帰結として生じる複数のプラス・マイナスについても考慮する必要があります。その時に助けられる見込みが極めて少ないと判断すれば、結果として付加されることが予想される「悪いこと」— 例えば、自分も死ぬことによって自分の家族、友人、勤務先などにも精神的・物質的な損害を与えること — を回避するためにいわば「見殺しにする」ことを選択したとしても、決して不正を犯したとは言えないでしょう。

『ソクラテスの弁明』からも明らかなように、他ならぬソクラテス自身もいわば「最小悪選択の原理」に基づいて行動しているのです。そしてこのように考えるとき、我々は『ラケス』篇と『プロタゴラス』篇を通底する問題の奥の深さを改めて実感するのでしょうか。前者においてはニキアス論駁を通して、勇気とは詰まるところ「あらゆる善いことと悪いことについての知識」に他ならないという結論が導かれます。これに対して後者においては「快の計量術」というものが提唱され、選択の対象が快樂と快樂であればより大きな快樂を選択し、快樂と苦痛であれば快樂を、苦痛と苦痛であればより小さな苦痛を選択すべきことが説かれます。これは要するに善悪の計量に還元されるのであり、その計量を正しく行うためには、まさに善と悪を見極める知識が必要となるのです。

ここでもう一度話をニューヨークに於けるテロ事件に戻して、この事件をテロを実行した側、もしくはその行為を支持する側から眺めてみれば、これまたイスラムの大義に殉じるという立派な目的のために死の恐怖を克服した称賛に値する行為ということになるでしょう。そしてこの場合においても、「死の恐怖」は実は最も恐ろしいこと（＝悪いこと）ではなく、むしろ宗教的信念を最優先しないことの方が恐ろしいこと（＝悪いこと）なのだというふうに言い換えることができます。しかし、ここで一つの疑問が浮かんできます。それは勇気というものが昔も今も称賛に値する美德と見なされている事実が一方にありながら、他方においては同じ行為 — 例えば旅客機を乗っ取ってビルに突っ込むという行為 — が見る側の立場によって、「勇気」とも「無謀」とも、あるいは「卑劣」とも言われ得るという事実があるということです。こうしてみると「勇気」というのは所詮、同一集団の中でだけ通用するいわば「閉ざされた美德」に過ぎないのでしょうか。それとも「敵ながら天晴れ」といった敵味方を超えた評価というもの、やはり存在し得るのでしょうか。存在しうるとすれば、その条件は何なのでしょう。そして仮に「恐ろしいことと

恐ろしくないことについての知識」としての勇気が善悪についての知識に還元されるとすれば、この問題は結局は、〈そもそも普遍的な善悪の基準はあるのか〉という容易に解決することもできないが、さりとて忘れることもできない難問に行き着かざるを得ないようです。あるいはプラトンはこうした事情をすべて見通していたからこそ、絶対的な根拠、基準としての「善のアイデア」を諸徳の根底に要請せざるを得なかったのだとも言えるかも知れません。しかし、これについてはまた別の機会に論じることとして、ひとまず稿を閉じることとしたいと思います。

註

- (1) この最終部の論駁については、参考文献中の拙訳解題（130頁以下）を参照されたい。
- (2) ここでは『ラケス』における「これから生じる」という時制の限定が無いことに注意。『ラケス』においてはまさにこの限定がニキアス反駁の足がかりとなる。

参考文献

- プラトン『プロタゴラス』藤沢令夫訳 岩波文庫
『国家』（上・下）藤沢令夫訳 岩波文庫
『ラケス』 三嶋輝夫訳 講談社学術文庫
『ソクラテスの介明・クリトン』三嶋輝夫／田中享英訳 講談社学術文庫
三嶋輝夫『規範と意味 — ソクラテスと現代』東海大学出版会
なお『ラケス』篇の解釈としては、今なお加藤信朗『初期プラトン哲学』（東京大学出版会）が先ず参照されるべきであろう。

あとがき

本稿は昨年度の大会に於ける発表原稿に加筆したものである。発表後の討論においては元特攻隊員のOBの方を始めとして、多くの方から貴重な質問やコメントを多数頂いた。会員各位並びに弘前大学のスタッフの皆様に対し、篤く御礼申し上げる。

（青山学院大学教授）